

螺悔戸芽（らぶこめ）高校ダイアリー

中沢 央

新しい制服に、新しい学生靴。今日から高校生活が始まる。

「いっけなくい！ 遅刻遅刻〜」

私、鬼頭 百花（きとう ももか）。今日から螺悔戸芽

（らぶこめ）高校の一年生！ 絶賛遅刻の危機！

確か、次はあその曲がり角を曲がるんだよね。

曲がり角を曲がろうとした、その時。

ドンッ。

「わっ」

いてて……。誰かとぶつかっちゃった。見た感じ、私

と同じ高校生かな？

「俺のトーストがあ！」

おい、トーストの心配より、私の心配しろよ。

「大丈夫ですか!？」

一応聞いたく。まあ、私常識人だし？

「いや、駄目だ……」

「え」

まさか、怪我でも……。

「地面に落ちちゃった。もう食えねえ」

「テメエの心配しているんだよ」

何でトーストの心配したと思ったんだ。

「えっ……俺の心配してくれてるのか？」

何で嬉しそうなんだよ。

「つてよく見たら、螺悔高の制服じゃん。一年生ですか？」

あれ？ 本当だ。確かに、螺悔高の男子制服だ。

「は、はい」

「じゃあ同級生だ！ まあ、一緒に行こうぜ！ 名前何

て言うの？ 俺は——」

「自己紹介している暇ないよ！ ほら、走って！」

あれから全力でダッシュしたおかげか、私たちはギリギリ入学式に間に合った。そして、トースト野郎は同じクラスだった。しかも、出席番号隣同士。

「結局お前の名前何なの？」

「静かに。そろそろ式始まるから分かるでしょ」

次々と名前が読み上げられていく。

「鬼頭 百花」

「はい」

返事をして立ち上がる。うん、緊張しないで返事ができた！

「木村 翔汰（きむら しょうた）」

「はい」

え。

木村 翔汰？ 小学生の時、よく遊んでいたショウチ

やん……？

私の視線に気づいたのか、木村君はいたずらっ子のよう
に笑った。

高校一年生の春、転校していった幼馴染と同じクラス
になった。

*

それが、去年の出来事。

そして、今日から私たちは二年生で新しいクラスにな
ったんだけど……。

「よお、百花。また同じクラスだな」

木村君は私の机に両手をつけて、顔を覗き込んでくる。

「信じられないな。これは運命って言えるんじゃない
か？ つまり、デイスティニー」

朝から真剣な顔で、恥ずかしいことを言うお前の頭
の方が信じられないよ。無理して英語使わない方が
良いよ。

お前、前回のテスト英語赤点だったじゃん。

「まあ、二年連続で同じクラスの人もいるし……」

「まるで少女漫画のようだよな」

「人の話聞けや」

って何？ お前少女漫画読んでことあるの？ お前確

か一人っ子って言ってたよな。

「ほらー、皆席着けー」

あ、今年の担任は……岡田先生か。去年と違う先生だ。

岡田先生は噂では二十七歳の若い男の先生。背も高
くて、けっこうイケメンだから嬉しい！

岡田先生は黒板に自分の名前を書いた。

「じゃあ、去年と変わらないメンツもいるけど、初め
しての人もいるから一応自己紹介するぞ。俺は岡田 慎
(おかだ まこと)。専門は日本史だ。よろしくな」

「岡田つちなんて超嬉し〜」

隣の席の立原 楓恋(たちらは かれん)が囁いてき
た。

「ねっ！」

私たちは顔を見合わせて笑った。他の女子も喜んで
いるんじゃないかな？

新学期開始から数日経った。新生も入学してきて、

今日は部活見学会だ。放課後が楽しみだなー。

次の授業は生物だ。今は楓恋と生物室に向かっている。

……ん？ 何やら前方に花吹雪が。え？ 廊下の窓開

いているのかな？

「何、あの花吹雪……」

「あれ、百花知らないの？ 二組の田中 源三(たなか

げんぞう)君だよ」

聞き間違いかな？ 高校生とは思えない古めかしい名

前が聞こえたような……。

「げ、源三？」

「そう。何でもいつつも花が周囲を舞っていて、噂では異星から来た存在とか言われているよ」

「ああ：：確かに花撒き散らす人がいるって噂は聞いたことがあるけど、あの人なんだ」

「でも、イケメンなんだよねー」

「マジ？」

源三が？

「マジマジ。田中君あのまま、あそこにいれば、ちょうど顔見れるかもよ」

どれどれ：：。田中君は友達と話していて、廊下から離れる気配が無い。田中君の顔が判別できるくらい距離まで来た。

眼鏡に、まるで芸能人のように整っている顔立ち。

全然源三顔じゃねえわ。もつと今どきの名前つけてあげればよかったのに。

「鳥の主食はカエルだ。で、カエルの主食は虫で：：：このような捕食関係のことを食物連鎖と言います」

木村君眠そうだな。後でノート見せてって言われても貸さんぞ。でもまあ、木村君の気持ちから分らないでもない。七限の授業って眠くなるよね：：。私は寝ないけどね。

今日から一年生の部活見学会。でも、私が所属する文

化祭実行委員は諸事情で今日が初めての顔合わせだから、すぐには部活に行けない。文化祭実行委員って何やるんだろ？

あれこれ考えていると、私の隣に男子が座ってきた。

知らない人だ。

「この席空いてる？」

顔が良い。

「あつ、うん」

「俺七組の田中 智也（たなか ともなり）。君は？」

顔良くて社交的とか絶対モテるだろうな。

「私は四組の鬼頭 百花。よろしくね」

「よろしく」

そうこうしているうちに、他の人たちも教室に集まってくる。

「あれ、田中も文化祭なの？」

「そうそう！ 何だ、藤澤も一緒かー」

「あつ、今気づいた。田中君よろしくね」

「あ、原西もいたんだ」

既に違う席に座っていた女子も、振り返って田中君と話し始めた。交友関係広そうな人だな。

今日はいくまで顔合わせだから、各自で軽い自己紹介と、先生の簡単な説明が終わったら解散だった。

さて、早く部活に行かなきゃ！

私は卓球部に所属している。

一年生何人くらい来てるかな？

「お疲れ様です」

「あつ百花。いいところに」

「いいところ？」

卓球台がある体育館二階に行った瞬間、友達の沢畑麗羅（さわはた れいら）に声をかけられた。

「今、めちやくちや強い一年生が来ちゃって、誰も歯が立たないの」

一年生……？

麗羅が指さした先には、キリつとした顔つきの男子がいた。あの人で合ってるのかな？

まだ見学期間だから制服姿（ブレザーは脱いでる）だけど、それでも上級生たちを負かしちゃうなんて、本当に強いんだなあ。

「あ、鬼頭」

部長も私に気づいた。

「おい、一年。次は鬼頭と勝負だ」

一年生は、どこか気怠そうな表情で私に視線を向けた。

「はあ」

何だろう。なめられてる気がする。よし、夜道には気をつけるよ小僧。

結果は、私の勝ち。

一年生は悔しそうに頭を抱えている。

「くそつ。何で僕が……」

「でも、君も強かったよ？」

一年生は拗ねたような表情を見せた。子供だなあ。

「私は鬼頭 百花。君、名前何て言うの？」

「八乙女 柊斗（やおとめ しゅうと）です」

「八乙女君は入部希望？」

私の質問に八乙女君は頷いた。だろうな。経験者だろうし。

部長が八乙女君に声をかける。

「お前、それくらい強かったら強豪校に行けば良かったのに」

確かに。螺悔高は卓球強豪校とは言えない。練習もあまりハードじゃないし。

「それは……強豪校で偏差値高い学校無かったから」

ここ、偏差値高いもんねえ。事実なんだけど、何か言い方ムカつくな。

「アイツすげー強いじゃん」

「ここ入ったら絶対レギュラー取れねえじゃん。他の部にしようぜ」

何やら他の一年生のヒソヒソ話が聞こえてきた。

これだけ強い同級生がいると、萎縮しちゃうよねえ。ぶっちゃけ、今日以降の見学期間中八乙女君は来ないでほしいなあ。

部活の後片付けが終わり、校門へ向かおうとしたところで声をかけられた。

「あ、百花」

木村君だ。

「奇遇だな。今帰りか？」

「うん」

「なあ、一緒に帰ろうぜ」

用事とかも無いしなあ。断る理由も無いか。

「別に良いよ」

「よっし」

そんなに嬉しそうにしないで。

私と木村君は並んで歩きだした。

「こうして一緒に歩いているとき、昔を思い出すよな」

「……そうだね」

今はトースト野郎のイメージが強いけど、昔はよく遊

んでいた友達の人だったんだよな。

「……あの」

「駅に新しいカフェ出来たんだよ。寄っていかねえ？」

「いいね！　どんな感じのカフェなの？」

「——あの」

「……ほら、こんな感じ」

「えー、凄い美味しそう！」

「あの！」

！？　びっくりした。

振り返ると、物静かそうな見た目の男子が立っていた。

確か、同じクラスの田中　理弥（たなか　としや）君だ

っけ？

「これ……落としたよ」

「あつ私のハンカチ！」

私は田中君からハンカチを受け取る。

「ありがとう、田中君」

田中君の肩が震える。

「僕の名前覚えてくれていたんだ」

「？　クラスメートだし」

田中君は何故か嬉しそうに、夕暮れの闇に消えていっ

た。

「……アイツ影薄いよな」

「悪い人ではなさそうだけどね」

駅まで行くにはバスに乗らなくちゃいけない。バスに

揺られて着いた駅のカフェは、学校帰りの高校生でござ

た返っていた。

「わー、席座れないかも……」

「テイクアウトしていいこうか」

「そうしよつか」

私はカフェモカ（ハチミツトッピング）、木村君はアイ

スコーヒーを頼んだ。

「JKばかりだったな」

「女子はカフェ大好きだから」

カフェで友達と何時間もおしゃべりするの楽しいんだよね。

「そういえば、電車何分後？」

「二十七分」

「そっか。じゃあ、飲み終わるね」

バスも三十一分後には来るし、ちようど良いね。

「そういえば、今日花びらを撒き散らしている人いたんだよ」

「あー、源三のことだろ？」

「知ってるんだ？」

「ああ。ていうか友達だし」

「そうなんだ。何繋がり？」

「んー？ 何きっかけだっけ？ たぶん友達の友達とか

の繋がりじゃねえの？」

まあ、友達と仲良くなったきっかけて案外覚えていないものだよね。

「そーいや、今日実行委員の集まりだったんだよな？ どうだった？」

「何で集まり今日だったの知ってるの？」

「お前がそう話してるの聞こえてきたから」

確かに楓恋たちには話したような気がするけど……。

「え、何？ 私の話盗み聞きしてるの？」

怖くねえ？

「そうじゃねえよ。お前の声は、よく聞こえちゃうんだよ」

「何で？ 私そんなに声大きいかな？」

木村君はため息を吐いた。

「分かんねえなら良いよ」

「？」

あー、このカフェモカ美味しいなー。また行こうっと。

「集まりは、まあ顔合わせ程度だから詳しい話もまだ聞いてないし、具体的に何やるかは、まだイメージつかないなあ」

「知り合いいいた？」

「それが、全然いないんだよ」

「ま、頑張れよ」

他人事だと思ってる感じの言い方だな。

その後も木村君と他愛ない話を続けた。

五月になると、大きなイベントがある。そう、スポーツ大会だ！

スポーツ大会は、ドッジボール、ベースボール、バスケット、バドミントン、テニスの五つの競技に分かれて、クラスごとに学年関係なく戦う。だから、私たちが三年生のチームと当たることもあるし、逆もしかり。私はドッ

デボールチームだよ。

「きゃっ！ 岡田先生のジャージ姿格好いい〜！」
女子の歓声が聞こえる。

岡田先生のジャージ姿は部活で見慣れているけど、どれどれ……。うっ！

初めて見るジャージだ！ やっぱジャージ姿でさえ格好いい！

「ヤバくない先生のジャージ姿」

楓恋と手を取り合っけきゃあきゃあ騒ぐ。

「それな！ あ、後で写真一緒に撮ってもらおうよ！」
素敵な提案！

「いいね！」

試合が順次行われていく。一回戦は三年生が相手だった。最後の大会なのに、とか言われそうだけど、勝負ごとで上級生に遠慮する必要はない。一回戦は勝てたけど、次はどうだろう。一年生のどこかのクラスと戦うみたいだけ。

あ、八乙女君じゃん。八乙女君も私に気づいたようであ、「あ」っていう表情をしていた。

八乙女君は先輩だからって手加減することはなさそうだし、気を引き締めないとなあ。

八乙女君のクラスとは接戦だ。今は一年生チームが残

り二人、私のクラスは私一人だ。……責任が重すぎるんじゃないあ！

八乙女君にボールが渡った。

「八乙女君、分かっているよね？ 私上級生だし……この野郎！ 最近日が伸びてきたからって調子こくんじゃねえ！」

「夜道には気をつけろってこと？ 怖……」

ギリギリ避けられたから良かったけど、アイツ本気で投げてきやがった！ 空気読めねえ後輩だな！

八乙女君に気を取られている暇はない。外野から鋭い攻撃が襲い掛かってくる。

八乙女君の攻撃に比べたら、優しいものだ。避けたボールは私のクラスの外野に行って……ギリ行かなかった！

しまった！ 私が取れば良かった！

一瞬の後悔が、私の動きを鈍くさせた。一年生の外野が投げたボールは私の肩に当たった。

「そんな……！」

一年生チームから歓声があがる。ああ、私が避けていれば……！

「まだだ！」

私たちのチームが負けを受け入れ始めた時、私の背後で誰かが叫んだ。

振り返ると、そこには田中理弥君がいた。

あれ、そういえば……。審判をしていた本郷先生も頷く。

「そうだな、まだ試合は終わっていないぞ」
たちまちどよめきが起こる。

「え、あんな人さつきまでいたっけ……？」

「田中君ってドツヂボールチームだったんだ。今気づいた」

「よっしゃ、まだ望みはあるな」

私もこの瞬間まで、田中君が残っていることに気づかなかった。本当に影薄いんだな。

「田中！」

ボールを拾い上げた田中君に、木村君が声をかける。

田中君は木村君めがけてボールを投げた。

木村君はボールをキャッチすると、間髪入れずに八乙女君めがけてボールを投げた。

八乙女君はボールをキャッチした——いや、手を滑らせてボールが落ちた！

「——ごめん！」

「え、俺最後？」

一年生チームも最後の一人だ。

最後に残された一年生は、慌ててボールを拾い上げると、私たちのチームの内野を見渡した。

「……どこだ？」

そう、田中君は本当に影が薄い。この特技ともいえる体質は、ドツヂボールで大いにチームに貢献している。全神経を集中させないと、無言の田中君を認識するのは容易なことじゃない。そして、私も今、田中君がどこにいるのか認識できていない。

外野も田中君を認識できていないようで、誰もパスを求める声をあげない。

仕方なく一年生は、内野へボールを投げた。

パシッ。

！　ボールがキャッチされた。

ああ、田中君あそこにいたんだ。外野と内野のギリギリのライン。すぐ後ろにいたはずの外野の人でさえ気づかなかったなんて。

田中君は外野へボールをパスした。伊藤君が投げたボールは当たらなかったけど、すぐさま対角線上にいた外野の山田君が再攻撃した。

山田君が投げたボールは一年生の肩に当たり——私たちは二回戦も勝利を飾ることができた。

三回戦以降は午後に行われる。今は昼休みで教室に戻るところ。さつきまで家に連絡する用事があって、校舎の隅の方に行っていたんだ。うちの学校、原則スマホ禁止だ。

教室の廊下に差し掛かろうとしたところで、前方から

担任が歩いてくるのが見えた。

「お、百花」

岡田先生は誰に対しても下の名前で呼ぶ。

「先生」

「すげえな！一回戦三年生が相手だったのに勝ったんだって？午後も頑張れよ！」

先生にそう言われると嬉しいな。

立ち去ろうとした先生に、私は慌てて声をかけた。

「先生！」

「ん？」

私はスマホを取り出した。

「一緒に写真撮ってくれませんか？」

先生は笑みを浮かべた。

「良いよ」

やった！

楓恋には抜け駆けしたようで悪いけど、先生とツーショットを撮れるなんて！何だろう、嬉しいのは優越感のせいかな？

——うん、いい写真が撮れた。

「先生ありがとうございます！」

「ああ」

えへへ、皆には秘密にしようっと。

三回戦は二年二組が相手だ。

ん？あの花吹雪は……。

「おい、源三！その花吹雪はズルくねえ！」

「うるせえ、この花吹雪は止めることができねえんだよ」
「やっぱり源三だったか。相変わらず源三顔してないわー。モテそうな顔してるなあ。」

「寝る時とかはどうしてるんだよ！」

「寝る時は止まってる」

「自由自在に操れるじゃねえか！」

他の人たちも審判の先生（名前は知らない）に詰め寄っている。

「先生、あれズルっすよね！」

「田中、花吹雪は禁止だ」

「えーマジかよ」

あ、源三の周囲から花が消えた。本当に自由に操れるんだな……。どういう原理？

二組との試合は私のクラスが有利に動いている。このままいけば、入賞も目指せるかも！？

二組は残り三人。田中君も花吹雪を出すことなく（今は外野にいるし）、真面目に戦っている。

清水さんが投げたボールが、相手チームの足に当たる。あと二人だ。

！ 二組のボール攻撃も、熾烈さを増してきているな。今度は避けられるか不安だな。

再び外野からの攻撃が来る。

え、ヤバイ！ 顔に当たる！

私は痛みを覚悟して、腕を顔の前にやって目をつむった。

……？ 痛くない。

恐る恐る目を開けると、目の前に源三がいた。

「えっ」

私が状況を理解できずにいると、周囲からヤジが飛んできた。

「おい、田中！ 何で相手チーム守ってんだよ！」

よく見ると、周囲で花吹雪が起こっている。もしかして……源三が花吹雪で守ってくれたの？

「女子の顔を傷つける訳にはいかねーだろ」

ひえっ。イケメンすぎる……。源三のファンになっちゃいそう……。

「ありがとう、田中君！」

「別に良いよ」

源三は何事も無かったように外野に戻っていった。ヤバイ。本当にファンになるかも。

「俺だって百花を守れたのに……」

お前は余計なこととして失敗して、貴重な内野を減らしそうだから止めてくれ。

結局試合は私たちのチームの勝利で終わった。今度は準決勝だ。本当に入賞狙えるんじゃない？

私たちは決勝で、殺意高すぎる三年生のチームに敗れた。殺意高すぎると田中君を認識することもできるみたい。

でも、全体で二位だもんね！ 凄いよ！

他の競技は賞を逃して、二年四組はドッジボールだけ入賞した。それでも岡田先生は凄く喜んで、後日クラス全員分のハーゲン○ッツを買ってきてくれた。

スポーツ大会も終わると、通常の日々が戻って来る。

今は自販機のジュースを買いに来た帰り。早く戻らないと、楓恋を待たせちゃう。

——わあっ。花が綺麗だな。

中庭にこんなに沢山の花が咲いているなんて、初めて知った。ちよっと見ていきたいな……。

よく見ると、ベンチもあるんだ……って。

「あれ？ 田中君」

同じ委員会の田中智也君は私に気づくと、少し目を丸くした。

「鬼頭さん。どうしたの、こんな所で」

「自販機の帰り。お昼一人で食べるんだね意外」

田中君は首をかしげた。

「何で？ たまには一人でゆっくり食べたいときもあるじゃん？」

田中君は一人が気にならないタイプなんだろうな。

「それにさ、この中庭めっちゃ綺麗じゃん。在学中にこの中庭を堪能しないのは勿体ないよ！」

確かに。現に私も、中庭の花が綺麗で足を止めた訳だし。

でも、楓恋を待たせちゃ悪いな。そろそろ戻るか。

……何だか知り合いに田中多いな。ややこしいから下の名前と呼んじゃうか。

「じゃあね、智也君」

「え、下の名前……」

「嫌だった？」

「ううん、全然嫌じゃないよ。……むしろ嬉しい」

智也君は慌てたように言った。

「じゃあね、百花ちゃん」

「うん！」

やっぱり下の名前と呼ばれると嬉しいな。

期末テスト一週間前になると、部活も休みになって放課後も残って勉強していく人が多い。私も、毎日学校に

残って勉強している。

数学の問題で分からないところがあつたから、職員室に来たんだけど、生憎、相沢先生は他の生徒対応中だった。

仕方ないから、今は職員室の廊下で相沢先生を待っている。職員室前の廊下は生徒が座れる場所が設けられているんだ。

あれ、源三だ。

「田中君、誰先生に用があるの？」

「ん？ 相沢先生」

「相沢先生、今他の人教えている最中だよ。それに、私の方が先ね」

「何だ。そっちも相沢先生待ちか」

源三は私の隣に座った。

「やっぱり数学の先生は需要あるな」

質問に来る生徒が多いって言いたいんだろう。

「期末テスト直前だしね」

「まあな」

田中君は問題集を閉じると、私に視線を移した。

「そーいや、何で俺の名前知ってるの？」

ああ、田中君と自己紹介したことなかったな。

「友達から聞いたことあつたんだよ。常に花が舞っている人がいるって」

「なるほどね」

「改めて、スポーツ大会の時はありがとう。ドッチボールの時、花吹雪で助けてくれて」

「ん？ ……ああ、あの時の」

良かった。田中君も覚えていたみたい。

「私、四組の鬼頭百花。よろしくね」

「よろしく」

「田中君って三男なの？」

「ん？ 何で？」

「だって名前に三がついてるじゃん」

「ああ」

田中君はバツが悪そうな表情をした。

「実は、俺の家系って花吹雪を自在に操れる能力を持っているんだけど、特定の名前を継いだ奴だけその能力を使えるの。源一、源次、源三がその名前なんだけど。俺のおとうさ…：親父は源次だから、俺は源三って訳」

さっきお父さんって言いかけたな。

「凄い名前だよ」

「俺この名前好きじゃねえんだよ」

田中君は頭を掻いた。

「古くせえ名前だって揶揄われたこともあるし。俺だって今どきの名前が良かったよ」

そっか…：。田中君、自分の名前のことで悩んでいたんだ。そのまま下の名前呼ばない方が良いかな。

「じゃあ、源君」

「源君…：？！」

源君は頓狂な声をあげた。

「嫌なら—」

「いや、嫌じゃない。何て言うか…：…：すげえ嬉しい」

その言葉が嘘じゃないっていうのは、源君の顔を見れば分かる。

「そのあだ名気に入ったよ」

私も何か言おうとした時、職員室のドアが開いて、生徒が一人出てきた。

「失礼しました」

「あっ、相沢先生終わったみたい。じゃあね、源君」

「じゃあな百花」

少し源君と仲良くなれた気がする。やったね。

期末テストが終わって一週間弱。今日から期末テスト上位者の名前が貼り出されている。…：…：うん、今回も総合一位！これは統大（正式名称統戴大学）も目指せるんじゃないかな？

「相変わらず凄いなお前は。担任として鼻が高いよ」
やったね、岡田先生にも褒められちゃった。

（続く）